

石牟礼道子がみた「差別」、と「怨念」  
間庭 大祐（甲南大学他非常勤講師）

本報告では、水俣病事件を「現在進行形」のものたらしめると同時に、「過去の出来事」として隠匿しようとする機序（差別）、ないしは、それを支えるメンタリティ（「怨念」）を検討する。その際、石牟礼道子の文学で描かれた、水俣病患者およびその家族が曝された差別のあり様に参照点を求めたい。そこに通底する差別の諸相は、現代に生きる我われすべての精神史的問題に違いないのだ。

周知のように、水俣病事件の総体を捉えようとするとき差別の問題を等閑視するわけにはいかない。というのも、水俣病事件の本質は、（大文字の）近代それ自体が構造として抱え込んでいる差別にその根源があるからである。これまでの多くの研究が指摘するように、水俣病と差別の関係は根本的な問題系を構成する。たとえば、「水俣病事件発生のもっとも根本的な、大なる原因は“人を人と思わない状況”いいかえれば人間疎外、人権無視、差別といった言葉でいいあらわされる状況の存在」（原田正純）だったとの指摘は、このように言い換えてもよいだろう。すなわち、差別は水俣病の発生によって起こったのではなく、差別のあるところに水俣病事件が起きたのだ、と。戦後日本の近代産業主義の貫徹（近代化の過程）の結果水俣病事件が惹き起こされたのだとすれば、水俣病は近代そのものの病理と言ってよい。なぜなら、近代のプロジェクトは近代化のプロセスに決して取り込まない領域を生み出すことによってはじめて始動するからである。その意味で、「水俣」は近代日本の犠牲になったのだ。実に、差別が水俣病事件を産んだのである。とはいえ、一般的に知られているような水俣病への差別がその鬼相を現わすのは水俣病が発生して以降のことである。それは、近代が内包する構造的な差別とは別様の「差別」である。たしかに、水俣病患者は構造的に近代のプロジェクトから排除されつつ、他方で、加害企業チッソから、また水俣市民（被害をより多く受けた「漁民」ではないという意味での「市民」）から差別および圧力を受けていた。しかしながら、「差別」は水俣病患者同士の間でも横行していた。石牟礼道子はこの点に着目する。

この場合、チッソからと水俣市民からの差別と圧力は、ある種近代の構造に根差した差別と言える。が、患者同士の間で繰り上げられた「差別」と圧力は近代特有のものではない。石牟礼のみるところ、そうした「差別」は、水俣病発生以前の、民衆らによって形成される前近代的な基層的文化に根づいたものであった。石牟礼の蹉跌と反省、そのうえでの透徹な批判的眼差しは、この患者間の「差別」に向けられる。

石牟礼は『苦海浄土』三部作、とりわけその第二部『神々の村』において、水俣病発生以前の共同体世界の暗部を鋭く捉えている。そこでは、水俣病発生以後の重層的な差別がそもそも伝統的な共同体世界における生活環境ならびに民衆のメンタリティや関係性に根差したものであることと同時に、「差別の湧いてくる源」が通常差別とはカテゴリー化されない、「もっとも虐げられるものたち同士によるべなき怨念」の間から立ち上ることを指摘する。彼女の理解する「怨念」とは、おそらく『隣の貧乏は鯛

の味』と表現されるような他者に向けられる「嫉妬」や「憎悪」のことである。ただし、それらはルサンチマンといった言葉に収まるものではない。それは、持たぬ者が持つ者に対して抱く(いわゆる弱者から強者への)羨望や妬みから発生するものでも、あるいは、これまでみずからが軽蔑してきた者の「成り上がり」に対する(いわゆる強者から弱者への)嘲りや憤りから発生するものでもない。石牟礼の言うところの「怨念」は、ルサンチマンのように「想像上の復讐」によって埋め合わされるものではなく、より現実的な、もしくは物理的な、あるいは可視化できる違い、それも「もっとも虐げられるものたち同士」の間で生起する違いに起因する負の情念の抽象的表現に他ならない。石牟礼は、斯かる「怨念」が共同体世界をひき裂き、かつ水俣病を「現在進行形」のものとして成している当のものだと指摘する。

もちろん、「怨念」を抱くことそれ自体は決して差別ではない。しかし、石牟礼のみるところ、「怨念」は「差別」を発生させ、水俣病患者と水俣市民との連帯をひき裂く装置に他ならないのだ。それは、前近代から受け継がれてきた民衆の生活世界(「ことばで殺し、殺される世界」)に根差すメンタリティによって醸成されたものである。とはいえ、石牟礼はそうしたメンタリティを有する共同体世界に対して本能的な嫌悪を表明してはいない。むしろ、そのような世界を反省的に眼差すのだ。というのも、こうした負の感情もまた人間的であり、ゆえにそれ自体否定できるものではないからである。そうであればこそ石牟礼は、逆に感情を持つからこそ人間は「人間の絆」を形成することもできるのだと暗に指摘する。おそらく石牟礼は、この点に水俣病事件の救済を求めたに違いない。では、その「人間の絆」とは何か。その射程の可能性と限界はどこにあるのか。議論したい。